格闘去勢少女 4

玉子王子　著

一章　もうこのポテト、味がしねえ

　ファーストフード店。

　オタク風の男がアイスをもって歩く。四つ。一人で食うわけではない、友人らの分をとってきているのだった。

　と、前を七歳かそこらの女児が走り抜ける。アイスを手に、楽しそうだ。

　オタク風の男、渡辺ハジメは同じぐらいの年の妹がいるのでなんとなく見てしまう。

　――危なっかしいな。サヤすぐこけるからな。

　と、妹と目の前の関係ない女児をダブらせている間に、間に何もないところで盛大にこけ、アイスを床に叩き付ける女児。

　怪我は無いが、体を起こし、しばし呆然とする女児。

　涙がにじむ。

　ため息をつくハジメ。

　――あー、あるある。よくやってるよ。

　思いつつ、女児の前に回る。

　少しして、ハジメは友人たちと席を囲んでいた。

　同じ総合格闘部の美少女三人。

　美少女は三者三様。

　スタンダードな赤髪ツインテールの爆乳少女桜津百合那はまっすぐ行儀よく座っている。

　スラッと背の高い、青髪ショートのモデルというにはワイルドな感じの巨乳少女森宮十志子は背を反らすので、ただでさえ大きめの乳房がさらに大きく見える。

　最後の一人は見ようによっては小学生のロリ系美少女、白崎真帆。銀色めいた色の髪をツインテールにしている、パタパタと足を動かしつつ、両手で頬杖をついて顎を支える姿は見た目をより幼く見せる。

　四人とも一七歳、同じ年である。

　アイスを食べつつ、ロリ少女がニコニコする。

「ドジだねハジメちゃん、アイス落としちゃうなんて」

「まあそういう事もあるよ」

「一口あげるよ」

「え、でも」

「あははは、間接キスだっとか騒ぐ年でもないでしょうが」

「そうよハジメ、私のもあげるわ」

「あたしのも一口だけな、ドジな奴だ」

　別に、ハジメはアイスを落とした女児に自分のをやったと説明したわけでもない。

しかし美少女らは三人とも武術や格闘技の使い手で、普通にしていても油断なく周囲をうかがっている。

特に、古武術使いの爆乳少女は。

アイスのことは彼女が気づき、他の仲間にも伝えていた。

――全く、ハジメったら優しいんだから……ほんと、こんな奴いないよ。全然恵まれた人間ってわけでもない、いい年こいて彼女もいないような奴なのに、なんでこんなに人に優しいんだろ。優しくしても別に何も返してくれない、弱い小さな子供相手に……。こんな優しいのに、彼女もいないのはやっぱり、こいつの良さがわかる奴ってなかないないからだろうね。十志子と真帆ぐらいかもねえ。あと、まっ、私もね。

一口齧られて帰ってきたアイスを再び食べつつ、ため息をつく爆乳美少女。

と、店に見た目のいい男三人組が入ってくる。

いかにも遊んでいそうだ。

その目に、パッとしない男一人と、美少女三人のグループが映れば、当然ちょっかい出そうという流れになる。

男一人が、いかにも弱そうなオタク風ならなおさらだ。

その前を、アイスを食べ終わった女児が走ってくる。

ぶつかりそうになる。それに、ニヤッと笑ってわざと体を接触させるイケメン。

「あっ」

ころりん、とその場に尻もちをつく。

見下ろし、頬をゆがめる男。

「おーっと、気をつけろよガキい。世の中には女にわざとぶつかって嫌がらせする悪い男もいるからなあ。俺らモテる人間はそんなことしないけどな」

涙ぐみ、慌てて立ち上がって走り去る女児。

笑いあう男たち。他人に害を及ぼし、反撃されないことで自分が強いと感じられるどうしようもないタイプの者たちだった。

そういう連中なので、桜津たち美少女といい思いをしたいというより、むしろ一緒にいるハジメを追い出し、傷つけたくて近づこうとしていると捉えたほうが正しいだろう。

一人が注文している間に、二人が近づく。

近づけば、会話も聞こえてくる。

「そういえばハジメちゃん、きりたんぽって知ってる？」

くりくりした目で上目遣いにオタクを見るロリ少女。

見られ、びくりと怯えたような表情を見せるオタク。

「し、知ってるよ」

「あは、なにビビってるのー？　デッカイキャン玉ぶら下げて！　肝っタマタマは小さいんだから！」

「というか、今の流れでなんでビビり始めるのかわからないんだがな」

「だよねえ。別に真帆、大した事言って無くない？　ま、それはいつもか」

「こら百合那ア。でも、今のは実際大したこと言ってないよー、ビビるのはおかしくない？」

「そ、そうだよね」

引きつった笑顔。

――ヤバい、流れ来てる。金的というか、急所攻撃系のお話、**口金的**が来る流れ。ああ、美少女三人とバイト――**去勢レディース天誅組**の仕事をバイトと呼んでいいのかは微妙だが――で稼いだ金でファーストフード食べるとか、僕なんかには望むべくもないような青春イベントで、ハンバーガーもアイスも、すごくおいしかったのに……金的イベントが始まったらそれどころじゃない。キ〇タマが縮んで、それどころじゃない。いきなり「きりたんぽ」の話を出す理由なんて、一つしかない。普通の女の子ならまだしも、この子たちが「きりたんぽ」って発言する場合は、もう絶対「切りチ〇ポ」って連想の話につなげる気に違いない。去勢話の開始以外に考えられない。そしてあわよくば、金的。ガチ金的に及ぶ気なんだ。ああ**……もうこのポテト、味がしねえ**。

怯えるハジメに、ニマニマする真帆。

「えへへ、なんでかなー。あはははは、ハジメちゃんは連想しちゃったんでしょうねえ」

手、小さい細い指、それで中指と人差し指を立て、チョキの形を作る。

「きりたんぽから、「**切りチ〇ポ**」を。似てるもんねー」

――やっぱりかい！　っていうか、まあそれしかないわな。その連想するため以外に、きりたんぽの話いきなりする理由ないわな。

汗が噴き出すのを感じるハジメ。笑う美少女たち。

「ぎゃはははは！　なんだそりゃ！　なんでも去勢と結び付けるなよ！　去勢不安デカすぎだろ！」

「そうよハジメ、気にしすぎ。まあ、真帆は**すぐ切っちゃう**からそういう連想されても仕方ないかもだけど」

ナノメカが発達し、玉を潰そうが竿を切ろうが、ほとんど秒で治る世界だ。だからといって「切った」と言ったら、実際に切っているとも限らない。

が、その爆乳少女、桜津百合那の言っていることはガチだった。

というか、その場の三人とも、斬ったり潰したりが大好きなドＳ女子と来ている。

ドＳ女性の割合が世界一といわれる、このうさぎ県の女子であるが、部に三人しかいない女子メンバー全員がドＳというのも相当な割合だ。

ちなみに男は一人、渡辺ハジメだけである。

遠くから見ればハーレム。

しかし、近くで話を聞いていると印象は変わる。

イケメン二人が、青ざめて立ち尽くす。

――お、おいおい……なんだこの女ども。切るとか切らないとか、おかしいだろ。いや、冗談なんだろうけど、それにしても……切りチ〇ポって……男なら、口にもできねえ。だって他人にするとしても、その場では他人にするとしても、自分もいずれちょん切られる可能性はある。だって付いてるんだから。でも、こいつらは女だから、一〇〇パーセントそれがないから、上から目線で一方的に……ヤベえよこいつら。というか、「女」という玉竿がない特権階級ヤベえよ。

「ちょっとー、十志子も百合那もひどーい！　真帆だけヤバい奴みたいじゃーん。十志子こそ、男の子片手で吊り上げて、もう片手で金ちゃん掴んで握り潰す癖にー。百合那だって片金ずつ確実に蹴り潰すような金的精度手に入れるのにどれだけ潰してきたのよー、きゃはははは！」

「いやいや、キ〇タマ潰しは女の権利だからな」

「そうだよ。ねえハジメ、悪い男の子は、タマタマ潰しが当然だよね？」

「え、あ、あは」

頬を引きつらせる。

適当にうなづいておけば、と思える立場にはない。

――ヤバいよ、ヤバいよ、下手に答えたら、どうなるんだ？　仮に「うん」って答えたら、適当になにか「僕が悪い理由」上げて、急所攻撃してきかねない。とはいえ「間違ってる」っていえば、悪い男を庇う悪い男として、やっぱり玉責めだ……この子たち、とにかく玉責め好きだから、何かにつけてそっちに誘導していくから……

青ざめ、目を泳がせる。

と、近くにイケメン二人を見つける。

――あ、この人たちは……僕と同じ、付いてる側だ！　助け船ぐらい……あ。

「お、こっちの席空いてるぞ」

「いいねいいねー」

「座っちゃうぞー」

「オッスお願いしまーす！」

足早に離れて、一番遠い席に座る。

座って、ちらっとばれない程度にハジメたちのほうを見る。

「くわばらくわばら」

「あんな**金責め好きの残念女**とかかわらないでも、俺らまともな女と付き合えるしな」

「モテないとああいうのの**理解ある彼くん**になるしかねーのか、それで玉責め食らいまくるんだな」

「理解って何理解すんだよ」

　小声で話しつつ、不思議がりつつ合流してきた仲間に、声をかけようとした女たちのヤバさを伝える。

「へええ、キ〇タマ持たねえぞそんな連中といたら。悲惨じゃねえか。いや、たまにそういう女いるけど……三人まとめて一緒にいるとか、あいつモテないからというより、相当なドMなんじゃねえの？」

「ああ……なるほど。それなら別にかわいそうでもないか」

　そう合理化すると、あっさり四人のことを忘れ、別の女に電話をかけ始める。

　イケメンには選択肢があるので幸せだ。

　オタクにはそんなものはない。

　というか、そもそも選択するかどうか、という前段階すらハジメにはない。

　離れようか、と考える余地がそもそもない。

　面倒だからさっさと離れよう、といえるほど薄い関係ではない。特に百合那は幼馴染であるし、**彼女の母親にガチ恋している**という業の深い関係でもある。

　さらに百合那はあまりはっきり意識していないが、ハジメのことが好きである。複雑で絡みついた関係といえる。

　とはいえ、あっさり離れようとは言わないまでも、少しはましな距離感を作ろうとすることはする。

　頬を引きつらせ、笑い顔を作りつつハジメが声を震わせる。

「そ、そのおお、なんていうか、外でこういう事言われるのって、結構僕、なんていうか、嫌じゃないんだけど……誤解されそうで。ほら、金責め好きな奴って思われそうで」

「それ誤解じゃないじゃーん、ハジメちゃんキ〇タマ潰されるの好きなドMじゃんねー」

「全くだ。好きなんだろ、急所攻撃。あははは、わからないなあ、女のあたしには。弱点の臓器が股の間にブラブラしてる感覚からしてわからないが、そこを責められるのがうれしいなんて。ブラブラーグチョ、が大好きなんて」

「う、うれしくない！　うれしくないって！」

「そういうが、こうやって」

　パン、とワイルド美少女が椅子を下げ、ハジメの位置から見えるようにして自分のスカートの前を叩く。

「ひっ」

「あはは、大丈夫大丈夫。あたしは付いてないから、コーガン。だからこうやっても平気。ほらほら、ベシベシ叩いても……あふううう！　あがあああああ！　とかいって、ケツ振りださない。おまたに臓器がないからな」

　自分が同じようになったら……と連想して怯えるハジメの姿を見つつ、熱い息を吐くワイルド美少女、森宮十志子。

　――はあ、たまらん。こうやってマ〇コ叩いて男に見せると、女の強さを実感できる。そして男の玉を叩いてやれば、男の弱さが実感できる。女は強い、男は弱い、股間を比べりゃ明らか。それがわからんクソオスは、大事なボールを握り潰す。うふふ、私のフィジカルなら別に金的狙わんでも大抵の男は圧倒できる。その体力で勝る相手に急所を狙われ、相手には同じ急所がない不公平に股間を押

さえて悶える男を見下すのは最高だ。ああ、特に渡辺みたいに、玉も竿も化け物並みにデカい男らしいモノをグチョグチョにするのは潰し甲斐があって、最高に濡れる。

チラ、と机の下のハジメの股間のほうを見る十志子。

唾をのむハジメ。

まさか自分の男性器をグチョグチョにするところを想像しているなどとは思いもよらない……という事は全くない。

時間としては百合那との関係と違って短いものだが、濃密な関りをしている――というと肉体関係のようだが、十志子たち三人は全員処女なのでそういう話ではない、週二三回は睾丸を潰しているという意味だ、三人ともがである。

まさに睾丸が持たないというしかない。実際潰れまくっている、ナノメカ入りの薬のヘビーユーザーである。安いし中毒性もないし、何度も使ったら効果が薄れるという事もないので構わない話だが。

ともかく、わかる。

ハジメにはわかる。

――うわ、うわ、森宮、僕の……僕のキ〇タマ潰すところ想像してる！　あの目は絶対……そうだし！　潰すときの楽しそうというか、なんかエロい感じの目だもん……

膝を締める。ギュンギュンに音を立てて縮む股間。それでも並みの巨根が立っている状態以上のサイズである。肉玉も鶏卵以上の大きさで、十志子が潰し甲斐を感じるだけのことはある。

その巨玉に、すっと手が伸びる。いつの間にか机の下に潜り込んだロリ美少女、白崎真帆の細い手だ。気づき、目を剥くハジメだが遅い。

「あ、ちょ……おおお」

恐怖に震える顔。

噴き出す幼馴染。

「ちょ、真帆やったわね。ゴールド確保」

「あははは、いいぞ真帆。そのまま握り潰しちまえ！　男はみんなクソオスだ、クソオス全員去勢しろ、キ〇タマ潰してメスにしろ」

――実際、こいつは男にしておくには惜しいいい奴だからな。ま、玉は治るんだけどな。

「ちょ、ちょ、ちょ、理由、理由もなくそんな」

机の下でしゃがんだ真帆、小さな手だが、慣れているので巨玉の根元を的確に握る。

「あはは、大丈夫大丈夫。ハジメちゃん何もしてないんだから、金ちゃん潰しなんてするわけないよ。多分ね？　きゃはははは！」

「た、多分って」

「うそうそ、本当だよ。でも、遊びのつもりで、片金ぐらい潰しちゃうかもねー、えへ☆　だって真帆、お股すっきり、女の子だモーン。おキンキンがどのぐらいで潰れるのか、全然わからないもんねー」

「う、うそ、嘘だ。僕より絶対わかってる」

「えー、なんで？　真帆付いてないよ、こんな、ちっちゃい女の子に握られただけで大ダメージの……きゅーしょっ！」

「あうおおおお！」

　きゅきゅうう、と強く握られ、思わず叫んでしまうハジメ。

　ぎょっとする客たち。

　血相を変えて駆け寄ってくる女性店員。

「お客様、どうかなさいましたか？」

　青ざめ、心配げだ。

　それに笑いかける百合那。

「ご心配おかけして申し訳ありません、大丈夫です」

「大丈夫ですか……でも今の声……」

「あはは、実は……机の下で……」

「え、あら、お嬢ちゃんどうしたの？」

「お嬢ちゃんって……まあ小さく見えるけどね、真帆は」

　小さくて可愛いのを理解し、売りだと思っている真帆。しかし素で子供と思われるのも引っかかる。

　まあ、机の下でしゃがんでいるのでわかりにくいというのもある。

　――でも、真帆制服なんだけどね？　百合那たちと同じ、高校の。

「その子握ってるんですよ。あは、丸い物、二個」

「え、え？　あは、うっそ、丸い物って……ゴールド系の？」

　口を押え、思わず素で笑いそうになる女性店員。

　その様子を見て、震えるしかないハジメ。

　――や、やべええ……この人も、ドＳ系女子！　そんな奴ばっかり……僕の周り、そんなんばっかりだ……なんで……そしてそいつら、どいつもこいつも僕のことを……

「あは、そういえばこの方……見るからに」

　声を潜める。

「ドMっぽい」

「あは、正解です」

「さすが年上は見る目があるな」

「ち、ちが……僕は……はふっ」

「はいきゅっきゅきゅー。ていうか、ハジメちゃんのタマタマ現状でも真帆の拳よりデッカーイ、ゾウさんなんて腕どころか太ももだし、現状で」

「え、ウッソ……やっぱり、ドMの変態さんは大きいんだ」

「ち、ちがっ、ふぐうううう」

「抜いちゃうぞ抜いちゃうぞ抜いちゃうぞ抜いちゃうぞ抜いちゃうぞ」

　強く根元を握って下に引っ張り、緩めて挙げ、また握って引っ張るを素早く繰り替えす真帆。

「ほおおおお！　やめ、やめえええ」

　急所への圧力に、体を強張らせ、机の上で拳を握って身動き取れないハジメ。

「あはは、楽しそう。ごゆっくり」

「ひいいいい、これが楽しそうって……」

　去っていく女性店員。

「あは、彼氏さんのキ〇タマが持ちそうにない魅力的な店員さんだったな」

「ま、真帆ちゃんやめえええ」

「大丈夫大丈夫、加減してるもん。まあ、真帆ってご存じの通り金の玉がないので、どのぐらいで潰れるかよくわかんないけどねー☆　じゃけんミスってゴールドクラッシュしたらめんごめんご♪　男の子であるハジメちゃんと違って素人なもんで」

「ちょ、ちょ、真帆ちゃんのほうが良くわかってるでしょ！　僕は一回も潰したことないけど、君は山ほど潰してるんだから、どのぐらいかはっきりわかるはず！」

「あ、こいつー、誰がキ〇タマ潰しの専門家じゃー、きゅきゅきゅのきゅー」

「あおおおおお！」

　人差し指と親指で根元を握られ、残りの指ともう片方の手で小刻みに玉を圧縮され、悶えるハジメ。

「ぎゃははは！　すげー顔だ！　悲惨だな！」

「もうハジメったらあ、男の子なんだから、もっとしっかりしなさいよ」

「お。男だからこれえええ」

「あは、まあそうよねえ。女の子なら、そもそもこの状況成り立たないし。**生殖器握り潰されそうになる**って、女にはありえない状況だもんね」

「というより、ちゃんとデザインされた生物ならそんなこと起こらないはずだよなあ」

「しょうがないよ。男の人のほうが、神様に先に作られたらしいもん。慣れてなかったんだよ。臓物外にぶら下げちゃっても、初めてなんだからしかたないよね」

「あたしら女は、慣れてからの作品だからすっきり収納と」

「あー、臓物ぶら下げられなくてよかったー」

「だよなあ。って、それごく当たり前の話って気がするがな」

「だよねー、エンジン外にぶら下げないっでしょ、車デザインするときはさー」

「あおおおお！」

「そらそらそらー、き・ん・の・た・ま、き・ん・の・た・まー」

「ぐもおおおおお！」

――だ、誰か止めて、店員さん、周りのお客さん……。

体をこわばらせ、目だけで周りを見る。と、結構周りに客がいるのに気づく。

目を爛々と輝かせた女性客たちが。

「あはは、どうしたのかなこの子？」

「お腹でも痛いのかも」

「いやーん、たいへーん」

「それとも、私たちにはない謎の臓器が痛いのかも」

「えー、なにそれー？　わからなーい」

どう見ても処女のわけもない大人女子たちが急所攻撃を受けてのたうつ若い男を見下ろして笑う。

居心地が悪いのか、男性客らはとっくに誰もいない。

気づいて愕然とするハジメ。

――ひ、ひいいい、誰もいない。この店に、キ〇タマは二つだけ。握り潰されつつある、二つだけ。っていうか、なんで握られてるんだっけ……

「ほら、頑張れ渡辺、あたしは応援するぞ」

「も、も、森宮……」

机の上で震えているだけの握り拳に手を当てる森宮。大きな手。ハジメより力はあるが、不思議と華奢である。

その手に引っ張られる。ぐにゅ、と柔らかい物に突っ込む。丸々とした十志子の乳房。

「あっ」

「ほら、揉んでいいんだぞ？　気を紛らわすんだ」

「あ、あ、あ……」

――っていうかこれ、応援とか気を紛らわすとかじゃなくて、金責めと乳揉みを同時に味合わせ、金責めに興奮させるようにもっていく調教なんじゃ？　ドM調教なんじゃ？

思いつつも、つい揉んでしまう男の本能。

と、反対側の手も、桜津が同じように自分の爆乳に触れさせる。

「ほら、こっちも、ハジメ」

「あ、あああ」

両手に美少女のオッパイ。

そして、睾丸を美少女にギュンギュンに握り潰される。

そのわけのわからない姿を多くの女たちにニヤニヤしながら見下される。

わけのわからない状況で、ただオッパイを揉み、睾丸を握り潰されているしかないハジメ。

唯一の救いは、この流れだと実際に潰す理由はないので、多分潰されまいといううっすらとした期待があるという事だけだった。

ただそれも、急所責めで性的に興奮してしまう少女らにどこまで通じるかは微妙だ。

「うふ、うふ、うふ、もう潰したい、潰したいよおおハジメちゃん。ねえ、何か言って？　女の子を悪くいってよ、女性蔑視発言してよ、そしたらそれを口実に……うふふ、うふふ、ガチで潰してあげるから、大きくて立派な、ハジメちゃんのき・ん・の・た・ま」

「お、女の子様のフラットなお股は最高に美しく、急所の設置場所である男の股間とは雲泥の差ですううう」

――クッソ、パイマ〇コパイマ〇コパイマ〇コおおおおお、腐れマンマンどもがあ、急所がないのをいいことに、一方的に狙ってきやがって……ああ、たま、たま、潰れるって、めまいが、吐き気が、ああ、玉がない女、急所がない股間、うらやましい、この苦痛がない女の子様うらやまし過ぎるっ。

罵ったり羨んだり、ハジメの心の中はぐちゃぐちゃだ。

それでも、普通の男のように、急所責めの苦痛と混乱で女性蔑視を口に出す様な事はなかなかしない。

ドM調教よりなにより、そちらの方向にしっかり調教されていた。

ヘタなことを口にし、烈火の金的責めを食らったり、他人が食らったりするのを数限りなく見てきた経験が、ハジメを自重させていた。

と、すでに退店したイケメンらに突き飛ばされた女児。まだ店にいた彼女がハジメの横に立つ。

「お兄ちゃん、なにしてるの？」

「な、な……」

「あれ？　お姉さんに……ええ？　うそ、大事なところ、キュッと？」

「そうなのよ。このお兄さん、そういうの大好きだから。タマタマ攻撃されるの、大好きだから」

「きゃあ、そうなんだ？　ヤバーい！　それじゃさっきのアイスのお礼に、タマタマ蹴ってあげようか？」

「え、ちょ」

「いいね、お願いしよう」

「そうだね。真帆も疲れてきたし」

　手を離す真帆。

　素早くハジメを羽交い絞めにし、前を向かせる十志子。

「ちょ、ちょ」

「軽くでいいよお嬢ちゃん」

「そうだよね、強く蹴るのはかわいそう」

「違う違う、あはは、あたしたち女の子はここ、蹴られても全然平気だけど、こいつら男はここに余計なもん付いてるだろ？」

「きゃはは！　余計なモノって！」

「パンツがもっこりして不細工だし、余計というしかないんだよなあ。しかもこれが弱い。死ぬほど弱い。お嬢ちゃんに軽く蹴られても十分大ダメージだから。むしろ……こんな大きなお兄ちゃんを、

軽く蹴って「はぐうう！」とか言わせたくないか？」

「ん……あは、いいねそれ。なんか、強くなった気がするもんね」

「というか、お嬢ちゃんもあたしらも、女に生まれた時点で強いんだよ。だってこんな……弱点付いてないんだから」

「ちょ、ちょま」

「それじゃタマタマ責めが大好きなお兄ちゃん、アイスのお礼行くね」

「ほら、膝つけ。高さが違うからな」

足を振り上げれば届くが、膝をついたほうが当然蹴りやすい。

それだと思いきり振り上げられなくて打撃が軽くなる気がする。

だが、当たる瞬間背伸びをして衝撃を吸収する涙ぐましい防御すらできなくなる。

――やべえ、やべえよ、膝つきはヤバい……

「それじゃ、お礼行きまーす。……っていうか、本当にお兄ちゃん、こういうの好きなんだよね？」

金蹴り好きなどといわれても、一女児として信じがたい。

まわりがそういう方向で盛り上がっている中、ふと立ち止まれる冷静さは驚くべきものだろう。

チラ、とアイスのお兄さんの顔を見る女児。

「う、うううう」

――好きなわけねえ。でも、嫌いだといっても、この子は蹴らされるだろう。周りがそういうふうに誘導するだろう。うまい事騙される。でもあとで「でもそういえば嫌だって言ってたな」と思い出して気にするかもしれない。どうせ蹴るなら、気楽に蹴らせてあげたほうがいい。

どこまでも優しいハジメ。

万一の場合、潰れたら治らないなら、さすがにどうにかして逃げようとするだろう。優しくする余裕などない。

だが、潰れても治るなら、痛いのを我慢すればいいと考えてしまう。

「す、好きだよ」

「きゃああ！　ハジメちゃんついに本音を！」

「というか、ハジメ優しいから」

「女の子に負担を負わせない。いいねえ、**渡辺ハジメは男でおます**」

「なんだその語尾？」

「あはは、そうなんだ。それじゃ、アイスのお礼にタマタマ蹴り行きまーす！」

「加減してね！？」

「うん、わかってるよ！　それじゃ！　かるーく、キーン！」

特に加減も何もなく、**普通に全力で足の甲を股間に減り込ませる女児。**

「ちょ、ぎょ」

目を剥くハジメ。潰れたか、と思うよりも、むしろ一個ぐらい助かってないかと祈るほどの衝撃。結果的には潰れていない。幼女の力であるから。しかし渾身であるという事が単純な力の多寡を超えた勢いを生んでいた。

全身から汗が吹き出し、内臓がぎゅううと引き締まる、声も出せない。

一見ノーリアクションにも見えるが、金的に慣れた女子たちは「声もあげられない」と正確に見抜

き、目を輝かせる。

「おーっと、でたー！　幼女特有、渾身の金ちゃん蹴りだー！」

「これはきついな」

「大人は女でもどうしても全力で金蹴りなんてできないし、男の子は当然自分のを蹴られるのを想像して全力蹴りは無理……消去法的に、何の遠慮もなく渾身の金蹴りができるのは小さい女の子だけ、という理屈なのよね」

「ロリに金蹴りされるの地獄説、ってところだな」

　力としては、大人の女の八割の蹴りよりはるかに小さい力しかないはずだ。

　だが何の加減もない渾身の蹴り――といっても思いきり力を込めているというわけでもない、加減が何もない、ナチュラルな全力という感じ――であるという事実は、物理的な力以上の凄みを与える。

　女児が足を引くと、ハジメは白目を剥き、ぐったりとうなだれる。

　目を輝かせる女児。

「きゃー、こんな軽い蹴りで大人の男の人が！」

「軽いって言うか、おもっくそ行ってたじゃない」

「やっぱり女児の金蹴りは最強ねえ」

「大人になっちゃうと、男のアソコに思いきりは難しいもんね」

「ある程度エッチすると、「なんだかわからない弱点の物体」じゃなくなるもんね、金ちゃんが」

「でもまあ、必要や**口実があれば**、潰れるまで金ちゃん蹴り余裕ではあるんだけどね」

「そりゃ、所詮は永遠に他人事だもんね、女にとっておキンキンは」

　ロリの金蹴りで泡吹いて動けなくなったというオチがついたので、ドＳ女子たちは散っていく。

　百合那が女児の頭をなでる。

「お礼ありがとうね。お兄ちゃん喜んでるよ」

「よかった！　こっちこそありがとうって言っておいてくださいね！」

　女児も去っていく。

　倒れたハジメの股間の周りにしゃがむ三人の美少女。

「で、玉だけど」

「潰れてないよー。でも、マジで子供って思いきり行けるよねえ、毎回びっくりするよ」

「別に潰す気でもないからなあ、今ので」

「私たちも見習わないとね、ちっちゃい女の子に金責め魂を」

「だな」

「優しいもんね、真帆たち」

　意識がないハジメは「“日課、睾丸潰し”のお前らが見習う必要なんてねーよ」などといえる状態ではなかった。

　いや、意識があっても絶対言えないが。

　いえば**日課が始まる**ので。

体験版終わり

この後もハジメと美少女の玉責め日常生活が続きます。
今回は格闘要素は特になし。
といっても、金蹴りや金カップなどの攻撃は山ほど出てきます。
続きは体験版でぜひお楽しみ下さい。